



Title	『古今集』「色もえなまし」の歌について：貫之の歌の表現形成を中心に
Author(s)	安, 佰潔
Citation	詞林. 2024, 76, p. 14-26
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/98180">https://doi.org/10.18910/98180</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『古今集』「色もえなまし」の歌について

——貫之の歌の表現形成を中心に——

安 佰潔

はじめに

紀貫之の和歌、特に『古今集』入集歌については、多くの先行研究があり、解釈について再考する余地は少ないように見える。だが、次の五七二番歌（寛平御時きさいの宮の歌合のうた）<sup>①</sup>、

君こふる涙しなくは唐衣むねのあたりは色もえなまし

（古今集・巻十二・恋二・五七二・紀貫之）

については、これまでの解釈にも疑問点があり、「色もゆ」という語を検討しなおすべきだと考えられる。本稿では、『万葉集』以後の和歌や漢詩文との関係を改めて調査しながら、その問題を考えたい。

まず、一九〇〇年代後半以降に出版された主要な注釈書の解釈例を出版年順に列挙する。

① 胸の辺はもえる「思ひ」（火）で赤くなってしまう

②

だろう。涙があるから、それで火が消されて赤くならず済んでいる。（佐伯梅友『古今和歌集』（日本古典文学大系）・岩波書店・一九五八年）  
君を恋うるにこぼれるこの涙がもしなかったならば、衣の胸のあたりは、思いの火のために、色も赤くなることであろう。（窪田空穂『古今和歌集評釈』・東京堂・一九六〇年）

③

あの方を恋しく思う涙というものが、もしないなら、唐衣の胸のあたりは、色も燃え立つであろうに。（竹岡正夫『古今和歌集全評釈』下、右文書院・一九七六年）

④

あなたを恋い慕う私の思いは、火と燃えている。もし恋の涙を流すことがなかったら、私の着物の胸のあたりは、真つ赤に燃えあがるであろうに。（奥村恒哉『古今和歌集』（新潮日本古典集成）・新潮社・一九七八年）

⑤

あの方を恋い慕って流すこの涙がないならば、この美しい衣の胸のあたりは、思いの火の色がきつと燃えたつてしまふでしょう。（小島憲之・新井栄蔵『古今和歌集』（新日本古典文学大系）・岩波書店・一九八九年）

⑥

あなたを恋する涙が流れて消さなければ、私の着物の胸のあたりは唐衣の色のように真つ赤に燃え上がることでありましように。（小沢正夫・松田成穂『古今和歌集』（新編古典文学全集）・小学館・一九九四年）

⑦

あなたを恋い慕って流すこの涙が、もしなかったならば、私の衣の胸のあたりは「思ひ」の「火の色」で燃えてしまふことでありましようよ。（片桐洋一『古今和歌集全評釈』（中）・講談社・一九九八年）

⑧

あなたを恋しく思つて流す涙がなかったなら、私の衣裳の胸のあたりは、恋の炎の色に赤く燃え立つだろう。（久保田淳・高野晴代・鈴木宏子・高木和子・高橋由記『古今和歌集』（和歌文学大系）・明治書院・二〇二一年）

一重傍線部で示したのは「もゆ」の原因となる内容である。「火」をその要素としている注釈が五例ある。「こふ（恋ふ）」の名詞形「恋ひ」（または「恋ひ」から連想される「思ひ」）

の「ひ」を「火」の掛詞と解釈し、その火のため、胸のあたりは燃えてしまふという。ただ③⑥⑧はそのような掛詞を解釈に介在させていない。二重傍線部で示したのは「色もゆ」の解釈で、七例は「色」を赤色か火の色と解している。③だけは色の種類を特定せず、「色が燃え立つ」とする。

また、古注釈でも、「色もゆ」については、「色」の色彩という義に注目し、火の赤い色と解釈する注釈がある。例えば、

⑨

むねのあたりは色もえなましと云事は恋をすればむねをこがすといふに、なみだだになからましかば、けすかたもなくてあかき色に燃なましとよめり。

⑩

これは実のことわりは置て形容よりよみたれば深く泥むへからす色もえなましは炎の色をいふ

（香川景樹『古今和歌集正義』<sup>3</sup>）

以上の解釈において、二つ問題点が指摘できる。一つは「恋ふ」の名詞形「恋ひ」や「思ひ」が「火（ひ）」の掛詞となっているという前提で、「もゆ」を説明する注釈が多いが、五七二番歌にはそもそも「ひ」という語がないため、このような掛詞を介在させることに無理があるということである。もう一つは「色」の解釈である。先行和歌の用例の中で、「燃ゆ」と赤色の関連は確認できず、「色もゆ」を「赤く燃える」と

するのは過剰な解釈だと考えられる。また、「色もゆ」という表現はこの紀貫之の歌が初出である。貫之がどうして「色燃ゆ」という表現を作り出したのかという問題もまだ検討されてない。本稿では、この問題について検討するとともに、和歌全体の解釈についても改めて考えてみたい。

# 一、「唐衣胸のあたり」とは何か

## （一）「涙」のかかる場所

五七二番歌では、「色もゆ」の主体は「唐衣胸のあたり」である。「君恋ふる涙」によって、「唐衣胸のあたり」が燃えることを阻止したと詠まれているため、「涙」も「唐衣胸のあたり」にかかっていると考えられる。「涙」と「唐衣胸のあたり」の組み合わせは以前の歌には見られない。『万葉集』の歌で「涙」がかかる場所としては、「袖」・「衣手」が四例、服全体を表す「衣」が二例、「枕」が二例、「ひげ」が一例見られる。例えば、次の『万葉集』二九五三番歌は涙で袖が濡れてしまうさまを詠んでいる。

恋君 オモヒコト 吾哭涕 ワガナクナミダ 白妙 シロタカラ 袖兼所漬 スベヘヒサナ 為便母奈之 セムスベモナシ

（万葉集・巻十二・正述心緒・二九五三）

涙のかかる場所を袖やその周辺とする表現はその後も一般化しているようで、『古今集』の中で、「涙」が服に関わるさまを詠む歌は、五七二番歌以外に、十三首見られるが、そのうち十一首は涙が「袖」・「衣手」・「袂」にかかる（「唐衣」

の袖が一首ある）歌である。ただ、例外として、「裳」と関わる歌が一首、「藤衣の糸」と関わる歌が一首あるため、それらを挙げておこう。

おやのまもりける人のむすめにいとしのびにあひて  
ものらいひけるあひだに、おやのよぶといひければ  
いそぎかへるとてもをなむぬぎおきていりにける、  
そののちもをかへすとてよめる 藤原興風

あふまでのかたみとてこそとどめけぬ涙に浮ぶもくづなりけり

（古今集・巻十四・恋四・七四五）  
ちちがおもひにてよめる 壬生忠岑

ふぢ衣はつるるとはわび人の涙の玉のをとぞなりける  
（古今集・巻十六・哀傷歌・八四一）

七四五番歌は、「もをなむぬぎをきて」という状況のもとで詠まれた歌であるため、「裳」を詠みこんだのであろう。相手が脱いでおいた裳が、自分の涙のため、藻屑のように浮かぶと詠む。八四一番歌は、藤衣に涙が残っている様子、その藤衣のほつれた糸で涙が結び留められたと表現する。涙を玉に見立てており、それに対応させて藤衣のほつれる糸を緒に見立てたと考えられる。七四五番歌における「裳」と「涙」の関わりは特定の状況（＝「もをなむぬぎをきて」）の下で、

「裳」＝「藻」の掛詞を介在させることによって成り立ったのであろう。八四一番歌において、「藤衣の糸」を「涙」と関わせたのは、「涙」＝「玉」、「糸」＝「緒」という見立の存在のためであろう。

だが、五七二番歌で涙が「唐衣胸のあたり」にかかることと詠まれた理由は、これらの歌ほどわかりやすすくない。そのため従来の解釈では「恋ひ」や「思ひ」が「火（ひ）」の掛詞であるという要素を介在させたりしてきたのであろう。その理由をまず「唐衣」という歌語自体の意味から考えていきたい。

## （二）「唐衣むねのあたり」と「涙」

「唐衣」は通常、枕詞として使われ、「着る」「裁つ」「返す」「張る」「袖」「紐」「袂」など服に関する言葉（またはそれらと同音の語）を導く。しかし、五七二番歌にはそれらに関連する語はないため、五七二番歌における「唐衣」は枕詞の役割を持っておらず、「衣」の歌語と見るのが妥当であろう。

では、「唐衣むねのあたり」という意味を持つのか、また、なぜ涙のかかる場所となったのか、ということが問題となる。そこには漢詩との関係が考えられる。漢詩には、涙で袖を濡らすという表現もあるが、「襟」「衿」「領」「懷」「胸」「臆」などにかかる漢詩文も多く存在する。例えば、

抗羅袂以掩涕兮 羅袂を抗<sup>あ</sup>げて以て涕<sup>おほ</sup>を掩<sup>おほ</sup>ひ

涙流襟之浪浪

涙は襟に流れて浪浪たり

撫衿長嘆息 衿を撫でて長く嘆息し  
不覺涕霑胸 覚えず涕は胸を霑す

（『文選』卷十九・曹植「洛神賦」）

佇立愴我嘆 佇<sup>ちやうりつ</sup>立して我が歎きを愴す  
寤寐涕盈衿 寤寐<sup>ごび</sup>して涕が衿に盈つ

（『文選』卷二十三・潘安仁「悼亡詩三首」）

感此涕洟瀾 此に感じて涕洟<sup>がくせん</sup>瀾たり  
洟瀾涕沾領 洟瀾<sup>うらん</sup>として涕領<sup>けう</sup>を沾す

（『文選』卷二十六・陸機「赴洛二首」）

唯有潺湲淚 唯潺湲<sup>せんげん</sup>の涙有りて  
不惜共沾衿 共に衿<sup>うけ</sup>を沾<sup>うけ</sup>すことを惜しまず

（『元氏長慶集』卷九・「夢井」）

いずれも涙が襟に流れ、襟や胸を濡らすさまを詠んでいる。「襟」「衿」「領」は服のえりの部分を指し、胸の前で合わせる部分である。「懷」「胸」「臆」は人間の体の「むね」の部分を指すが、これらの漢詩においては服の胸のあたりを指すのであろう。

和歌においては、「涙」が「袖」や「袂」などにかかるという表現が主に用いられてきたという伝統があるが、五七二番歌で「唐衣むねのあたり」という表現が使用されたのは、

涙が「襟」などにかかるという漢詩の表現が意識されていたためであろう。つまり、「襟」などの語を受容した結果生み出された表現だと考えられる。次にそれがどうして「燃ゆ」の主体となるのかを考えたい。

## 二、なぜ「唐衣むねのあたり」は燃えるのか

『万葉集』において、「もゆ（燃ゆ）」の用例は十六例あるが、そのうち九例は感情に関わる。感情表現に使われる「燃ゆ」は「こころ」に関わる用例が六例、「ふじのたかね」に関わる用例は三例ある。一方、『古今集』における「もゆ（燃ゆ）」の用例は十四例あるが、感情に関わる用例は十三例（【付録】に参照）あり、「もゆ」の主体は【表一】のように整理できる。

「燃ゆ」の主体	用例数
火（篝火や蚊遣火）＋我が身	三
富士のね＋我が身	一
野辺＋我が身	一
富士のね＋思ひ／恋ひ	三
小野の浅茅＋思ひ	一
夏草＋思ひ	一
蛩	二

## 唐衣胸のあたり

一

五七二番歌以外は全て火・蛩・富士などの燃焼と関わる物象と共に用いられる。「思ひ」や「恋ひ」の「ひ」に「火」を掛け、燃えることと心情と結合させる用例は六例ある。五七二番歌には、火・蛩・富士などの「燃ゆ」と関わる物象もなければ、「思ひ」や「恋ひ」という語も使われていない。「唐衣胸のあたり」は元来燃焼と関係のない物象であるが、『万葉集』で詠まれた「心（に／は）もゆ」の「心」と距離的に近い。五七二番歌でも、心が燃えるから、その心に近い服の胸のあたりも燃えてしまうという理屈の存在が考えられる。また、燃焼と関わる物象がないという点では、五七二番歌は『万葉集』の「こころ（に／は）もゆ」に近い。『万葉集』の「こころもゆ」の用例を検討してみよう。

忽沈<sub>ニ</sub>枉疾<sub>一</sub>、殆臨<sub>ニ</sub>泉路<sub>一</sub>。仍作<sub>ニ</sub>歌詞<sub>一</sub>、以申<sub>ニ</sub>悲緒<sub>一</sub>。  
 首〔并短歌〕  
 間使毛<sub>マツカヒモ</sub> 夜流余之母奈之<sub>ヨルユノモナシ</sub> 於母保之伎<sub>オモホシキ</sub> 許登都氏夜良受<sub>コトツナヤラヌ</sub>  
 孤布流尔思<sub>コフハルモ</sub> 情波母要奴<sub>セイハハハハ</sub>：

（万葉集・卷十七・三九六二・大伴家持）  
 吾妹児<sub>ワザモコ</sub> 恋為便名鴈<sub>コヒスベ</sub> 胸乎熱<sub>ムネハユキ</sub> 旦戸開者<sub>イトドケルモノ</sub> 所見霧可聞<sub>ミユキキコエ</sub>  
 （万葉集・卷十二・三〇三四）

『万葉集』三九六二番歌は「こふるにし こころはもえぬ」

と、恋するため心が燃えると詠む。三〇三四番歌は「こころもゆ」ではないが、「こふ」ることが胸が熱く焼かれることの理由として詠まれている。『万葉集』の「こふる」ことが「こころ」や「胸」の燃焼につながる趣向が、五七二番歌の表現を支えていると見ることができよう。

また、『万葉集』の時代から和歌に影響を及ぼしたと考えられている『遊仙窟』と『玉台新詠』において、以下のような表現が見られる。

芙蓉生於澗底、蓮子実深。芙蓉澗底に生へ、蓮子実に深し。

木栖出於山頭、相思日遠。木栖山頭に出で、相ひ思ひて日遠し。

未曾飲炭、腹熱如焼。未だ曾て炭を飲まざれども、腹熱きこと焼くるが如し。

不憶吞刃、腸穿似割。刃を吞むと憶はざるも、腸穿たるること割くるに似たり。

（張鷟『遊仙窟』）

積恨顔將老 恨みを積んで顔は將に老いんとし  
相思心欲燃 相ひ思ひて心は燃えんと欲す

（『玉台新詠』卷五・範雲「思婦」）

『遊仙窟』の詩句は、「相思」（相手のことを恋しく思うこと）のため、腹が燃えているように熱いと詠み、「思婦」の詩句

は「相思」のため、心が燃えてしまいそうだと詠む。このような発想が和歌に浸透していたと考えられる。例えば、五七二番歌と同じく寛平御時后宮歌合の歌の中にも、次の歌がある。

人をおもふ心のおきは身をぞやく煙たつとは見えぬものから

（寛平御時后宮歌合・右・一六九）

「人をおもふ」ことで心が燃える（「心のおき」）という趣向は五七二番歌と似ている。

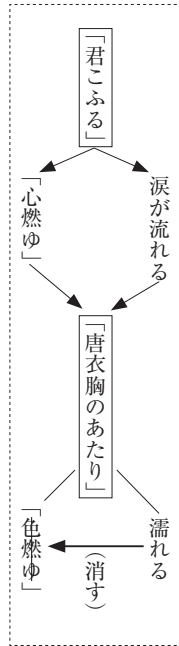
要するに、五七二番歌には、古今集時代の歌では「燃ゆ」と詠む際よく使われている燃焼と関わる物象や、「思ひ」「恋ひ」と「火」を掛ける掛詞はない。だが、その「燃ゆ」が成り立つ背景は『万葉集』及びその時代によく知られている漢詩文の中にあり、「恋ふ」から「燃ゆ」という発想は『万葉集』時代から継承されてきたものである。五七二番歌を解釈する際、「思ひ／恋ひ」＝「火（ひ）」という掛詞の要素を介在させる必要はないと考えられる。

ただ、五七二番歌の「燃ゆ」の主体は『万葉集』のそれと違って、「唐衣胸のあたり」＝服となっている。もし『万葉集』と同じように「燃ゆ」の主体が「こころ」であつたら、五七二番歌は「恋して涙が流れるから心の火が消される」ということになる。恋するから心が燃えるのに、その結果流れた涙



によって、心が燃えなくなるといえるのは道理に合わない。五七二番歌の「燃ゆ」は、心が燃えるから、服の胸のあたりも燃えてしまうと解釈すべきである。「唐衣胸のあたり」は「涙が流れる」と「燃えない」ことの因果関係が成り立つ場所となっている。【図一】で示したように、「君こふる」から涙が流れ、心が燃える。涙が流れるから、服の胸のあたりは濡れてしまう。心が燃えるから、心に近い服の胸のあたりも燃えるはずだが、服の胸のあたりまで流れてきた涙によって火を消される、という趣向になっているのであろう。そしてその燃えるさまを「色もゆ」という、これもそれまでになかった語で表現している。

【図一】



### 三、「色もゆ（燃ゆ）」という表現の成立

#### （二）「色」と「もゆ（燃ゆ）」の組み合わせの生成

先に述べたように、「燃ゆ」と色彩が関わる表現はそれ以前にも同時代にも見いだせなかった。なぜこのような表現を

用いたのだろうか。

#### 1. 漢詩の啓発

まず注意されるのは、白居易「燕子楼三首」の二首目である。

鈿暈羅衫色似煙 鈿は暈りて羅衫色は煙に似たり

幾回欲著即潸然 幾回か著けんと欲して即ち潸然

自從不舞霓裳曲 霓裳の曲を舞はざりしより

疊在空箱十一年 疊みて空箱に在ること十一年

〔白氏文集〕卷十九・〇八六一・「燕子楼三首併序」其二

女性の立場で詠んだ詩であり、「かざりがかすんでしまつて、薄絹で作った服の色は煙のようだ。何度も身に着けようと思つたが、すぐ涙が出てしまふ」という。序の「予愛三絶之新詠、感彭城旧遊、因同三其題作三絶句」によると、この詩は張仲素の「燕子楼」に唱和したものだといふ。張仲素の原詩をあげておく。

北邙松柏鎖愁煙 北邙の松柏愁煙を鎖し

燕子楼人思悄然 燕子楼の人思ひ悄然

自埋劍履歌塵散 劍履を埋めしより歌は塵と散じ

紅袖香消已十年 紅袖の香り消えて已に十年



（唐・張仲素・「燕子樓詩三首」（一作関盼盼詩）<sup>(10)</sup>）

北邙は洛陽に位置する山で、後漢以後、王侯公卿の墳墓の地として知られるようになる。また、中国で松柏を墓地に植える習慣があり、墓地の松柏を詠む漢詩句が多いため、「北邙松柏」は墓地の情景を描いた表現と考えられる。

「煙」という語は元来「火の気」（『説文解字』）という意味である。唐代では葬式やお墓参りなどの時、紙銭（祭事、葬礼などの時に使う紙で作った貨幣を模したもの）などを焼くことが習慣であったため、この詩の「煙」は、火を焚いたときに空中に立ちのぼったものであろう。「北邙松柏鎖愁煙」は張尚書が葬られた場所に悲しい煙が漂っているという意味で、その次の句からわかるように、悲嘆の主体は「燕子樓人」、つまり眇眇である。死んだ恋人を偲んで、身を包む悲哀を墓地に漂う煙に重ねており、「思悄然」という感情が「煙」に喻えられている。

白詩の「鈿暈羅衫色似煙」の「煙」は薄絹の服の色の比喩に使われたが、この句は張仲素の詩を受けて詠まれたものであるため、「北邙松柏の煙」とその煙に重ねられた悲哀の心情を意識しながら、「羅衫色似煙」と詠んだのであろう。また、白居易にも次のような例がある。

北邙原辺尹村畔 北邙原辺尹村の畔

月苦煙愁夜過半 月苦え煙愁へて夜半ば過ぐ

（『白氏文集』卷三十・三〇四一・「哭師皋」）

この詩の「煙」という語も亡くなった人への思いが込められている。「燕子樓」の「鈿暈羅衫色似煙 幾回欲著即潸然」は、亡き恋人を思い、流れる涙の中で、服の色が煙に見えているという情景を描いている。その煙は、北邙松柏の煙に重なり、追慕・悲嘆の情を募らせる。五七二番歌と「燕子樓」は「唐衣」と「羅衫」、「色もえなまし」と「色似煙」に表現の重なりがあると考えられ、追慕・悲嘆の情を詠じている点でも共通している。

また、「煙」が燃焼とともに詠まれる表現は貫之と同時代の和歌にも見られる。例えば、現存する寛平御時后宮歌合の歌を確認すると、煙を詠む歌は四首ある。

浦ちかくたつ秋霧はもしほやく煙とのみぞ見え渡りける

（寛平御時后宮歌合・右・七九）

おもひにはあふ空さへやもえわたるあさたつ雲を煙とはして

（寛平御時后宮歌合・左・一六六）

おもひ侘びけふりは空に立ちぬれどわりなくもなき恋のしるしか

（寛平御時后宮歌合・左・一六八）

人をおもふ心のおきは身をぞやく煙たつとは見えぬものから

（寛平御時后宮歌合・右・一六九）

いずれも燃焼（塩焼く・燃ゆ・おもひ<sup>11</sup>火・おきなど）によつて煙が立つ情景が詠みこまれている。「煙」から燃焼が連想させるのは自然なことであろう。

貫之は、「燕子楼」の「鈿暈羅衫色似煙」に触発され、「色似煙」の「煙」から「燃ゆ」を連想し、「色燃ゆ」という表現を得たのではないだろうか。この「色燃ゆ」がどのような感情を表現しているのか、更に詳しく検討しておきたい。

## 2. 「色燃ゆ」が意味するもの

貫之の和歌に見られる「燃ゆ」の語で、感情表現に使われる用例は五七二番歌（『貫之集』では巻五・五七八）を含めて五例ある。他の四例を挙げておこう。

もえもあへぬこなたかなたの思ひかな涙の川のなかにゆ  
けばか

（貫之集・巻五・五五六）

もゆれどもしるしだになき富士のねに思ふ中をばたとへ  
ざらなん

（貫之集・巻五・五六七）

しるしなき煙を雲にまがへつつよをへてふじの山はもえけり

（貫之集・巻五・恋・六五九）

：世の人の おもひするがの ふじのねの もゆる思ひ  
も あかずして：

（古今集・巻十九・雑牀・一〇〇二）

『貫之集』五五六番歌の「もえもあえぬ」は、不完全な燃焼を意味する。同五六七番歌は富士山の「燃ゆ」ることを、同六五九番歌は富士山の煙を「しるしなき」ことと評しているため、これらの「燃ゆ」は激しく燃え上がらず煙を出してくすぶるような燃焼であると考えられる。『古今集』一〇〇二番歌の「燃ゆ」についてはそのような判断ができないが、仮名序の「ふじのけぶりによそへて人をこひ」が「ふじのねのならぬおもひにもえばもえ神だにけたぬむなしけぶりを」（古今集・巻十九・雑牀・紀乳母・一〇二八）などを踏まえているとされていること<sup>12</sup>から、表面に出ない、煙を伴う内面の燃焼を示す語と推測できる。そして五七二番歌では、白詩からヒントを得た「色」という語を前に置くことで、「燃ゆ」に新たなニュアンスを付与したと考えられる。以下でその意図を探ってみたい。

多くの先行研究において、『古今集』の和歌が時系列に基づいて規則的に配列されていることが指摘されている。巻十一（恋一）から巻十五（恋五）までの恋の部立ての中でも、時の推移に伴う恋の進行が見られる。小町谷照彦氏は、『古今集』の恋歌は五巻にわたって、恋愛の経緯が順に配列され、

「恋一・恋二では、噂に聞く人、仄かに見た人へのほんのわずかな思慕が、次第に深まり大きくなって、しまいには切実な慕情となり、心中秘めていた恋の思いに堪えられなくなつて、ついに表情や態度に表われて表面化するという、忍ぶ恋、片思いの過程が辿られている」という。

五七二番歌は恋二に収められている。恋一から恋五までの巻において、「燃ゆ」という語の見える歌（【付録】を参照）は以下の通りである。

恋一…五〇〇番、五二九番、五三〇番、五四三番

恋二…五六二番、五七二番、六〇〇番

恋四…六八〇番、七九〇番、七九一番

これらのうち、五七二番歌より前の歌を見てみよう。五〇〇番は「したもえ」、五三〇番は「したにもゆ」という表現を使い、表に出さない恋心を詠む。五二九番は「下燃ゆ」などの表現を使っていないが、その後の五三〇番歌と同じく篝火に寄せた歌で、忍ぶ恋を詠んでいると判断できる。五六二番歌は「ひかり見ねばや」と相手が自分の恋の思いに燃えている光を見ないことをかこつ。自分の意志かどうかはさて置き、結果として「相手に知られない恋心」を詠む点では、前の「下燃ゆ」と通じる。

五七二番歌より後の歌はどうだろうか。六〇〇番の「燃ゆ」は「下燃ゆ」かどうか判断できない。六八〇番歌は「相見る恋」の歌であり、相手のこととなると、会つていようがいま

いが、富士山のように燃え続けると詠む。七九〇番歌は詞書に「やけたるちのはにふみをさしてつかはせりける」とあつて、意中を相手に伝えるという歌である。これに続く七九一番歌もまた野焼きに寄せた歌であり、同様に望みのない恋の嘆きを詠じている。

つまり、恋一から恋五までの「燃ゆ」という語の见られる歌のうち、五七二番歌より前の歌は、「下燃ゆ」というような忍ぶ恋の性格が強いが、それより後の歌は「下燃ゆ」の要素が見られず、むしろ相手に気持ちを伝えようとする姿勢を示す。五七二番歌は両者の過渡的段階、つまり心中に秘めていた恋の思いが表面に出そうになっている状態を詠じている。また、前節で述べたように、五七二番歌の「燃ゆ」は他の用例と違い、その主体が唐衣の胸のあたりである。「唐衣胸のあたりは燃ゆ」という事態は「心燃ゆ」がもたらしたもので、この服の燃焼は心情の表面化を意味すると考えられる。ここでの「燃ゆ」には「下燃ゆ」の意味がない。それは「色」という語が用いられたことにも示されている。

『万葉集』の時代から、「色に出づ」という歌語があり、恋心の露頭を詠む時に使われていた。『古今集』の恋歌に使われる「色に出づ」は、恋一に三例、恋三に四例見られる。小町谷氏が「恋一と恋三とは、『色に出づ』にまつわる状況が異なるようである。恋一の場合は、恋の思いを心中に秘めているつらさを耐え忍ぶ歌であり、恋三の場合は、二人の仲

が世間に知られるのを憚るつつむ恋の歌である。片恋の場合は恋の思いを表に出す、つつむ恋の場合は恋仲であることが人目に付くということになる」と指摘する。<sup>15</sup>恋二の巻には「色に出づ」の用例がないが、それを補うためか、「色燃ゆ」と詠む五七二番歌が配列された。五七二番歌は、深まってきた秘めた恋心が露顕しそうになる状態（「色燃えなまし」というので、まだ表に現れていない）を詠じていると考えられよう。「君こふる」という心象が、「色燃ゆ」という語によって物象化され、可視化される。この歌が恋二に配列されたのは、以上の論理が「色燃ゆ」に内包されているためであろう。

#### おわりに

前節で、『古今集』恋歌の配列と「色」という語を使う表現・「色に出づ」の意味用法を手がかりに、「色燃ゆ」が表現する感情について検討した。そこから、なぜ貫之が「色燃ゆ」という表現を作り出したのかという問題の答えも見えてくるであろう。貫之は『万葉集』以来の「こころ燃ゆ」と「色に出づ」の伝統を踏まえ、「燕子楼」の「鈿暈羅衫色似煙。幾回欲著即漕然」という句からヒントを得て、秘めていた恋の思いが表面に出そうになる過渡的状态を表現するため、「色燃ゆ」という歌語を案出したと考えられる。

また、『万葉集』と漢詩の表現の中に、「君こふる」から「燃ゆ」につながるといふ表現基盤が存在していたため、五七二

番歌を解釈する際、「思ひ」「恋ひ」と「火」という掛詞表現を介入させる必要はない。そして、「色」という語が表す色相にこだわる必要もない。貫之が「色燃ゆ」と詠む際、赤などの色に注意を向けているのではなく、恋心が燃え立つさまを服が燃え立つさまに喩え、そこに漂う心象風景に白居易の「燕子楼」を重ねながら、「色に出づ」の「色」も意識して、恋心の露顕する直前の段階を表現した語と言えよう。

以上の考察に基づいて、五七二番歌の筆者なりの現代語訳を示しておく。

あなたを恋して流す涙がなければ、（あなたを恋して心が燃えるため）唐衣の胸のあたりは、色が燃え立つであらうに（恋心が露顕してしまいそう）で。

伝統的な和歌の表現と漢詩的表現を独自に構成して表現したところに貫之の新しさがあるのではないだろうか。

#### 『引用本文』

・和歌及び歌番号は『新編国歌大観』（日本文学WEB図書館・古典ライブラリー）による。『万葉集』の歌番号は旧番号を使用した。小字は「（ ）」によって表記する。

・『文選』の詩文は『文選』（蕭統編、李善注、中華書局・一九七七年）による。

・『元氏長慶集』は『元稹集』（冀勤点校、中華書局・一九八二年）による。

・『白氏文集』は『白居易集箋校』（朱金城箋校、上海古籍出版社・

一九八八年）による。詩文番号は花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店・一九六〇年）「第三部 作品表と編目索引」による。

・『玉台新詠』の詩は『玉台新詠箋注』（穆克宏点、中華書局・一九八五年）による。

・『遊仙窟』の詩は『遊仙窟校注』（唐・張鷟撰、李時人、詹緒左校注、中華書局・二〇一〇年）による。

・張仲素の詩は『全唐詩』（中華書局・一九六〇年）から引用した。旧字体を新字体に変えた。

・漢詩文に適宜読み下し文か返り点を付け加えた。

# 【注】

(1) 『古今集』では、五七二番歌は寛平御時后宮歌合の歌だと記されているが、現存する寛平御時后宮歌合の諸伝本では確認できない。

(2) 国書データベース・書陵部蔵『顯註密勘』（明暦3刊 <https://doi.org/10.20730/100233378>）による。

(3) 香川景樹『古今和歌集正義』校訂・解説瀧澤貞夫（勉誠社・一九七八年）

(4) 『釈名・釈衣服』…襟、禁也、交<sub>二</sub>於前<sub>一</sub>、所<sub>三</sub>以禁<sub>二</sub>禦風寒<sub>一</sub>也。『釈名』附音序、筆画索引、劉熙撰、中華書局・二〇一六年）

(5) 『釈名・釈衣服』…衿、亦禁也、禁使<sub>二</sub>不得<sub>一</sub>解散也。（同前）

(6) 『釈名・釈衣服』…領、頸也、以<sub>レ</sub>壅<sub>二</sub>頸也<sub>一</sub>。亦言<sub>二</sub>總<sub>一</sub>領衣<sub>レ</sub>体<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>中端首<sub>一</sub>也。（同前）

(7) 『万葉集（1）』（新編日本古典文学全集）（三六四頁）、『万葉集（3）』（新編日本古典文学全集）（三三六頁）で、『万葉集』巻

四・七五五番の「吾<sub>レ</sub>胸<sub>二</sub>截<sub>一</sub>焼<sub>二</sub>如<sub>一</sub>」、卷十二・三〇三四番の「胸<sub>二</sub>乎<sub>一</sub>熱<sub>二</sub>、不<sub>レ</sub>憶<sub>二</sub>吞<sub>一</sub>刃<sub>二</sub>、腸穿<sub>二</sub>似<sub>一</sub>割<sub>二</sub>」や「旧来心肚熱」などの表現に基づく指摘。

(8) 「おき」は熾火（おき火）のことである。

(9) 序…徐州故張尚書有<sub>二</sub>愛妓<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>昶<sub>一</sub>、善<sub>二</sub>歌舞<sub>一</sub>、雅多<sub>二</sub>風態<sub>一</sub>。予為<sub>二</sub>校書郎<sub>一</sub>時、遊<sub>二</sub>徐<sub>一</sub>、泗間。張尚書宴<sub>レ</sub>予、酒酣、出<sub>二</sub>昶<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>佐<sub>二</sub>飲<sub>一</sub>、飲甚。予因贈<sub>二</sub>詩<sub>一</sub>云、「醉嬌勝不得、風嫋牡丹花。」尽<sub>レ</sub>歡而去、邇後絶<sub>二</sub>不<sub>一</sub>相聞、追<sub>レ</sub>茲僅<sub>二</sub>一紀<sub>一</sub>矣。昨日、司勳員外郎張仲素繪<sub>二</sub>之訪<sub>一</sub>予、因吟<sub>二</sub>新詩<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>燕子樓<sub>一</sub>三首、詞甚婉麗。詰<sub>二</sub>其由<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>昶<sub>一</sub>作也。繪<sub>二</sub>之從<sub>二</sub>事武寧軍<sub>一</sub>累年、頗知<sub>二</sub>昶<sub>一</sub>始末、云、尚書既歿、歸<sub>二</sub>葬東洛<sub>一</sub>。而彭城有<sub>二</sub>張氏<sub>一</sub>旧第、第中有<sub>二</sub>小樓<sub>一</sub>、名<sub>二</sub>燕子<sub>一</sub>。昶念<sub>二</sub>旧愛<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>嫁、居<sub>二</sub>是樓<sub>一</sub>十餘年、幽独塊然、于<sub>レ</sub>今尚在。」予愛<sub>二</sub>繪<sub>一</sub>之新詠、感<sub>二</sub>彭城<sub>一</sub>旧遊、因同<sub>二</sub>其題<sub>一</sub>、作<sub>二</sub>三絶句<sub>一</sub>。『白氏文集』卷十九・〇八五九）

(10) 『全唐詩』卷三六七。また、卷八〇二、関盼盼の作として「北邙松柏鎖<sub>二</sub>愁煙<sub>一</sub>。燕子樓中思悄然。自<sub>二</sub>埋<sub>一</sub>劍履<sub>二</sub>歌塵散<sub>一</sub>。紅袖香銷<sub>二</sub>一十年<sub>一</sub>」がある。

(11) もちろん、中国の漢詩文では、「煙」はもやかすみなどと解釈する場合もあるが、その「煙」もやはり「けむり」のような「水の気」であるため、「燕子樓」の「けむり」は火の気のほうの「煙」なのか、もやかすみめのほうの「煙」なのかに拘る意味はない。

(12) 奥村恒哉校注『古今和歌集』（新潮日本古典集成）（新潮社・一九七八）一八頁。

(13) 小町谷照彦『古今和歌集と歌ことば表現』（岩波書店・一九九四年）第一章『古今集の世界』第三節「恋歌の世界」六一頁。

(14) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』（風間書房・一九八〇年）第九章「恋歌の構造」第四節「恋歌四の構造」五〇九頁。

(15) 小町谷照彦『古今和歌集と歌ことば表現』（岩波書店・一九九四年）第一章『古今集の世界』第三節「恋歌の世界」七一頁。

『付録』『古今集』における感情表現に使われる「燃ゆ」の用例

夏なればやどにふすぶるかやり火のいつまでわが身したもえをせむ

（古今集・卷十一・恋一・五〇〇・読人しらず）

篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の河にうきてもゆらむ

（古今集・卷十一・恋一・五二九・読人しらず）

かがり火の影となる身のわびしきは流れてしたにもゆるなりけり

（古今集・卷十一・恋一・五三〇・読人しらず）

あけたてば蟬のをりはへなきくらしよるはほたるのもえこそわたれ

（古今集・卷十一・恋一・五四三・読人しらず）

〔寛平御時后宮歌合の歌〕

ゆふされば螢よりけにもゆれどもひかり見ねばや人のつれなき

（古今集・卷十二・恋二・五六二・紀友則）

君こふる涙しなくは唐衣むねのあたりは色もえなまし

（古今集・卷十二・恋二・五七二・紀貫之）

夏虫をなにかいひけむ心から我も思ひにもえぬべらなり

（古今集・卷十二・恋二・六〇〇・凡河内躬恒）

君てへば見まれ見ずまれふじのねのめづらしげなくもゆるわがこひ

（古今集・卷十四・恋四・六八〇・藤原忠行）

あひしれりける人のやうやくれがたになりけるあひだに、

やけたるちのはにふみをさしてつかはせりける

時すぎてかれゆくをののあさぢには今は思ひぞたえずもえける

（古今集・卷十五・恋五・七九〇・こまぢがね）

物おもひけるころ、ものへまかりけるみちに野火のもえけるを見てよめる

冬がれののべとわが身を思ひせばもえても春をまたましものを

（古今集・卷十五・恋五・七九一・伊勢）

あふことの まれなるいろに おもひそめ わが身はつねに

あまぐもの はるる時なく ふじのねの もえつつとはに お

もへども あふことかたし…

（古今集・卷十九・雑躰・一〇〇一・よみ人しらず）

ふるうたたてまつりし時のもくろくのそのながうた

…世の人の おもひするがの ふじのねの もゆる思ひも あ

かずして…

（古今集・卷十九・雑躰・一〇〇二・つらゆき）

ふじのねのならぬおもひにもえばもえ神だにけたぬむなしけぶりを

（古今集・卷十九・雑躰・一〇二八・紀乳母）

（あん・はくけつ 本学博士後期課程）